



Outsider Art Photograph Exhibition

東と西の写真家がとらえたアウトサイダー・アート写真展

2007年11月3日(土) ▶ 12月28日(金)



当ミュージアム始まって以来の写真展であり、また海外作家を招聘しての展覧会であった。

スイス、ローザンヌ市にある市立美術館アール・ブリュット・コレクションの専属カメラマンを務め、世界中のアウトサイダー・アートやアーティストをカメラに収めて来たマリオ・デル・クルト氏と日本国内のアウトサイダー・アートや制作現場を収めてきた大西暢夫氏の作品が洋の東西を超え展示された。

展示作品の中には、既に実物の作品がアーティストの命とともに捨てられてしまっているものもあれば、作品が建造物であるために移動ができないものも多くある事から、写真でしか目にすることができない作品が数多く展示された。

写真のレンズを通すことによってその瞬を記憶し、時間や空間を超え、私たちに人の表現する素晴らしさや躍動を伝えてくれる。

今回の展覧会では、まさに写真のもつ力を活かし、世界と日本のアウトサイダー・アートの魅力ともいえる人が表現する・創造することの豊かさを伝えた。またアーティストの制作風景を見ることが出来る数少ない機会としても多くの観覧者が訪れた。

「近江八幡お茶の間ランド」に

ちょっと寄ってくれはらへん?

2008年1月12日(土) ▶ 2月17日(日)



独立行政法人福祉医療機構の助成により開催される「ボーダレス・アート企画公募」事業は、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAの趣旨でもある、障害者ジャンルにとらわれない作品そのものが放つエネルギーに主眼を置き、既成の概念や制度を超えた新しい「アウトサイダー・アート」普及とその一端を担う人材の育成に主眼をおいている。

この事業を通じて、アウトサイダー・アートを展覧会という形で紹介していくこと、また、アウトサイダー・アートの裾野を広げ、ネットワークを広げていく事で、より、有機的な関わりを作っていくことを狙いとしている。

3度目となる今回の企画者「ART LAB OVA」は、横浜を中心に15年ほど前からアートを通じて人とモノをつなげる活動を行ってきている。この展覧会にあたって、10月に近江八幡の町を実際に歩いて調査、取材を行うと同時に、地域の子もたちに呼びかけ「へんてこ★アート調査隊」を結成し、子どもの視点で町歩きをしながら、面白いスポットを捜し歩いた。

平成19年1月12日(土)から始まった『「近江八幡お茶の間ランド」にちょっと寄ってくれはらへん?...ふつうの町のキュートな日常...』には、滋賀県内外の40名近い方々に協力をいただき、16名の方に展覧をしていただくという、今までにない展覧会となった。

創作されたものではなく、例えば、自宅に数十年にわたりコレクションしている箸袋や切手、店にずっと残っていた商品など、出展していただいた方にまつわるストーリーを持ったモノをお借りしインスタレーションという手法を使って展示された。数える事ができないぐらいの数のモノたちに囲まれた今展は、出展数が全く把握できない。このモノから喚起される言葉が展示を変えていく。そういう意味では出展されたモノだけでなく観覧者の言葉そのものが展示物と変化していたのかもしれない。それが空気となりNO-MAにしっかりと残り「お茶の間」の雰囲気そのものも楽しむ事のできる展覧会となった。

2007ボーダレス・アート企画公募

2007年	
5月上旬	全国公募開始
8月3日	締切 16件の応募が全国より寄せられる
8月9日	一次審査会書類選考 5名件を採択
8月20日	二次審査会プレゼンテーション ART LAB OVAに決定
10月1日~	ART LAB OVA現地調査
10月27日	へんてこ★アート調査隊 実施
11月3日	へんてこ★アート調査隊 実施
2008年	
1月5日~	2007ボーダレス・アート企画公募 搬入
1月12日	オープニング・関連イベント
2月9日	関連イベント
2月17日	関連イベント・終了

アール・ブリュット
交差する魂

北海道立旭川美術館 Report

2008年1月16日(水) ▶ 2月17日(日)

厳冬の旭川にアール・ブリュットの熱い風が吹き荒れた!!

1月16日から日本3会場巡回展の第一会場として、道立旭川美術館で「アール・ブリュット/交差する魂」が開催され、2月17日で終了した。

日本では世間に浸透していない「アール・ブリュット」にどれほどの集客力があるのか不安だったが、展覧会の入場者数は2174人の大盛況となった。この時期の旭川は外気が日中でもマイナス15~19度となるので驚異の入場者数だ。一人で2回、3回と観に来る方たちもおり、とても関心が高い展覧会の内容であるのだということに気づかされた。

アンケートもたくさん寄せられました。いくつか紹介する。「すごい」一言に尽きます。人間って素晴らしいと思わせることに会うことがあります。今日はまさにそれです(20代女性)「作家の心の中にどんな事があるのか理解は出来ないけど、何か心打つものがあります(30代女性)「果てしないイメージの世界は怖いぐらいです。圧倒されました」とあった。

「エネルギー」「感動」「驚き」「表現することの素晴らしさ」のキーワードがアンケートには並んでいる。通常の美術展では感じられないことを来館者は感じ取っているようだった。

こんな感想もあった。「アール・ブリュットが何なのか、観に来て理解することが出来ました(50代男性)とにかく見て、感じる事が、アール・ブリュットを理解する早道のような。この「アール・ブリュットの風」は日本に猛々しく荒々しく、今後も吹き荒れることだろう。世間がそれをどのように受け止めていくのか、私はとても楽しみにしている。それにしても、このような素晴らしい展覧会を旭川で開催出来たことは本当に幸運だった。

NPO法人 ラポラポラ 理事代表 工藤和彦



スイス ローザンヌ アール・ブリュット・コレクション 「JAPON展」 2008年2月22日 ▶ 9月28日

JAPON展を訪れて

森田真潮 (毎日新聞 大津支局)

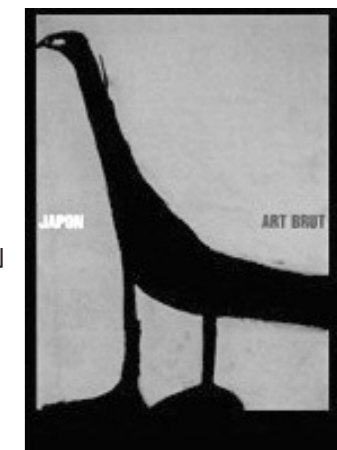
「アール・ブリュット・コレクション」の「ジャポン」(JAPON)展オープニングは、200人超と見える人たちが会場を埋め尽くした。

シンプルかつ重厚な舐次崇さんのパステル画のポストカードを買い求める人、鳥の目で町を見るような辻勇二さんのペン画を気持ちよさそうに見上げるおじさん、かぶりもの宮間英次郎さんに話しかける親子連れもいる。埴輪を思い起こさせる小幡正雄さんの段ボール画の前では、笑みを浮かべる人が相次いでいる。ペリー館長も「この展覧会はきっと成功する」と、朝からやや興奮気味に見えた。

「アール・ブリュット」そのものは、ごごんまり見える建物に、展示スペースが4階までびっしり。1階全体と2階の1室を占める「ジャポン」展と同時に、天井から1階まで下り下げられたアロイズの絵など館の収蔵品展示を見て回る。

展示品の多くからは、圧倒される重苦しさというより、見ると元気づけられるような印象を受けた。はかなげでもあり、力強くもあるような線がつくる、えもいわれぬ魅力的な人の形。曼陀羅のように細かく描き込まれた世界に垣間見える、どこかユーモラスで、とぼけた感じすらする味わい……。と、美術館に来たようでもあり、博物館の中にいるようでもある、不思議な気分。この感じは「作者自身に出品しようという意思があまりない」と関係しているのかなあと、後になってぼんやり考えている。

展示品は、誰に見せるでもなく、ただ、特定の個人の時間がたつぷりと注ぎ込まれたもの。ある人が生きた時間の一部が形になったもの。こうした「作品」を見て、確かにそういう風にもものを見ることができるとか、自分の感覚を形に表すことができるとかいうことを、勝手に確認している感じ。「社会的に追いやられた人の作品」と聞いて沸いてきていた、「追いやるような社会をつくっておいて、出来てきた作品を見て喜んでいいのか」という疑問は、いつの間にか忘れてしまっていた。いいことなのかどうか。ともかく、「作品」たちとの関係から、自分の中に柔らかさが生まれてきているような気がしている。



COLLECTION DE L'ART BRUT

2007 夏からの展覧会ダイジェスト

生きものバンザイ!

2007年8月3日(木) ▶ 9月24日(月・祝)



当ミュージアムは昭和5年(1930年)に建築された町屋である。やがて80年の歴史を迎えようとする旧野間邸に人々ではなく、生きものが暮らしていたらどんな雰囲気になるのだろうか? そんな思いから企画した。

赤松キミコの作品の花びらから生まれてきた生きものたちが姿かたちを変え、庭に蔵にそして館内に点在し、暮らしている。ここは現代の世知辛さなど微塵もなく、ただひたすらそれぞれのペースで「生きる」という<生>のエネルギーだけが表出していた。

表の道路を散歩する飼犬が外堀においている井上信太の作品に真剣に吠えている。それも毎回そこを通るたびに。中庭では蔵の大江正章の作品を覗きながら近所の飼猫や野良猫たちがひなたぼっこをしている。動物たちは本展の

作品たち(生きものたち)の生のエネルギーを何の違和感もなく感じ取り、そして自らもこの生きものたちが巣くっているNO-MAに立ち寄ってきたのだろう。そして、2階の展示スペースにはあべ弘士のダイナミックな3頭の虎が観覧者を出迎える。

これまで当ミュージアムとは、またひと味違った「作品から表出するエネルギー」を感じてもらえた企画展だったと感じている。

第4回滋賀県施設合同企画展

ing... ~障害のある人の進行形~

2007年10月2日(火) ▶ 10月28日(日)

猪田育久さんデザインの下、仲間のみんで制作にかかったという大型スパイダーマン!半立体ならでは迫力が会場を盛りだてた。会場裏庭の蔵には絵画に陶芸にと同じ車をモチーフにした岡元俊雄さんの素材が変わってもテーマは変わらない静かな愛情が伝わる作品を多数展示した。

二階には手にとってみたくなるような生活により近い作品を集めた。個人から個人へむけられた手紙。とても個人的な関係の上で成り立つものだが、岩根和恵さんの手紙からはその枠に納まり切らない表現が感じられた。展覧会出品の話を持ちかけたところますます張り切って手紙を制作する彼女。「書く」から「作る」へ。絵でもなく写真でもない見る手紙。そんなカタチでの想いの伝え方も、もちろん素敵だと微笑ませてくれるような作品を集めた。

作者と作品、そして見る人の距離が近くに感じられる展覧会となった。



Outsider Art Photograph Exhibition

東と西の写真家がとらえたアウトサイダー・アート写真展

2007年11月3日(土) ▶ 12月28日(金)



当ミュージアム始まって以来の写真展であり、また海外作家を招聘しての展覧会であった。

スイス、ローザンヌ市にある市立美術館コレクション・アール・ブリュットの専属カメラマンを務め、世界中のアウトサイダー・アートやアーティストをカメラに収めて来たマリオ・デル・クルト氏と日本国内のアウトサイダー・アートや制作現場を収めてきた大西暢夫氏の作品が海の東西を超え展示された。

展示作品には、既に実物の作品はアーティストの命とともに捨てられてしまったり、作品が建造物であるために保管ができないものも多くある事から、写真でしかみることのできない作品が数多くある。

写真のレンズを通すことによってその瞬を記憶し、時間や空間を超え、私たちに人の表現する素晴らしさや躍動を伝えてくれる。

今回の展覧会では、まさに写真のもつ力を活かし世界と日本のアウトサイダー・アートシーンをつなぎ見る人に人が表現する・創造することの豊かさを伝えた。またアーティストの制作風景を見ることが出来る数少ない機会としても多くの観覧者が訪れた。

「近江八幡お茶の間ランド」にちょっと寄ってこればらへん?

2008年1月12日(土) ▶ 2月17日(日)



2007ボーダレス・アート企画公募

2007年	
5月上旬	全国公募開始
8月3日	締切 16件の応募が全国より寄せられる
8月9日	一次審査会書類選考 5名件を採択
8月20日	二次審査会プレゼンテーション
	ART LAB OVAIに決定
10月1日~	ART LAB OVA現地調査
10月27日	へんてこ★アート調査隊 実施
11月3日	へんてこ★アート調査隊 実施
2008年	
1月5日~	2007ボーダレス・アート企画公募 搬入
1月12日	オープニング・関連イベント
2月9日	関連イベント
2月17日	関連イベント・終了

出展いただいた方自身も、出展することで芋蔓式にストーリーが記憶から引き出され、展示が変わっていく、というのも本展の大きな特徴となった。

展覧会は静かに観覧するもの、展示作品には触ってはいけないという、暗黙のルールは今回の展覧会には不要であった。観覧者自身が展示を触り、語っていく、進行形の展示であった。

地域交流



昨夏の企画展に出展いただいたあべ弘士さんが私たちにこんなメッセージをくれた。「動物園の飼育係だったころ、自分たちはこの動物園で何を大事にし、何を考えるべきなのか、ということについて話していた。パンダやキリンのことを考えるのではなく、自分たちはこの北海道で生きているキタキツネとかのことをもっと考えていかないと。そもそもパンダたちはこの地にはいなかった。この地に元々から生きている動物たちのことを大事にして考えてあげないと。それが動物園で働く自分たちの仕事だ。」と。

当ミュージアムについても同じことが言えるだろう。自分たちが活動しているこの地(足元)とのことを再度見つめ直し、誰からも愛されるミュージアムにしていくために何を大事に、何をしていくのか、改めて考えさせられた。

当ミュージアムでは、今年度、夏休みに「NO-MAの小さな夏祭り」として、1週間日替わりのワークショップを地元の小中学生を対象に開催した。アクセサリーづくり、スライム作り、影絵に絵画などのワークショップを開催し、のべ90名を超える子供たちが参加してくれた。冬には近江兄弟社小学校の親子プログラムとの連携で、「まちの木霊を探そう!」と題し、NO-MA周辺の町中をグループに分かれて、散策し、街の中にある「ちょっと気になる」看板や小屋や石ころなどを探して回った。そしてそれらをインスタントカメラに収め、オリジナルマップを作成し、白雲館(観光案内所)に展示した。

交流や連携という意味では、もっと色々な関わり方があるのかもしれない。今年度実施した事業をさらに深め、そして発展させながら、地域の一文化施設として、地域の人たちが、気軽に立ち寄れる空間としてあり続けたいと考えている。

アール・ブリュット/交差する魂

ローザンヌ アール・ブリュット・コレクションと日本のアウトサイダーアート

open in **ボードレス・アートミュージアムNO-MA**
2008年2月28日(木) ▶ 5月11日(日)

next in **松下電工汐留ミュージアム**
2008年5月24日(土) ▶ 7月20日(日)



アール・ブリュット<生の芸術> (またはアウトサイダーアート) と称される作品たちは、正規の美術教育を受けていない人たちによって、文化潮流や伝統また流行などとは無縁に制作されている。作り手本人のやむにやまれぬ何かの思いにのみ司られ、作られているのだ。それゆえにその作品たちは、人が人として存在する上で根源的に持っている「表現したい衝動」というものの底流を、ありありと伝えて来る。

誰の真似でもない、誰の影響も受けてない、誰の評価も期待しない、自分だけの陶酔のためにある表現。



私たちが実はかつて持っていたかもしれない感覚、しかし今は確実に持っていない感覚、遠い遠いところに捨て去って来た感覚。その表現感覚との出会いは、私たちにとって深い奥底から揺り動かされるような未知の美術体験となるだろう。

欧米では既に価値付けられているアール・ブリュット・コレクションの作品と近年発見された日本国内の作品が、初めて洋の東西、民族や歴史、文化を超えてここに共存することになる、前例の無い試みがこの展覧会の最大のみどころである。

それらは、5つのテーマに分けられ誘われている。

「人のカタチ」「都市の夢」「文字という快楽」

「凝縮された宇宙」「想像の王国」

それぞれのテーマの中で、東西を超えた人間の共通普遍の強烈な表現エネルギーを、耽溺するほど体験できる。

本展は、ボードレス・アートミュージアムNO-MAと、スイスのアール・ブリュット・コレクションとの2年間に渡る連携により開催されている。

NHK新日曜美術館の特集編を初め多くのマスコミで紹介され、話題を呼びながら現在、NO-MAで開催中であり、5月24日(土)より東京、松下電工汐留ミュージアムに巡回し開催される。



上・中 NO-MA展示風景
下 旧吉田邸展示風景

詳細情報 <http://www.no-ma.jp/artbrut/>

●アール・ブリュット・コレクション (Collection de l' Art Brut) とは

「芸術はわれわれが用意した寝床に身を横たえに来たりはしない。芸術は、その名を口にしたとたん逃げ去ってしまうもので、匿名であることを好む。芸術の最良の瞬間は、その名を忘れたときである。」芸術家ジャン・デュビュッフの言葉は、アール・ブリュットの概念を総括する根幹としてとらえることができる。アール・ブリュットの作者たちは、あらゆる文化的な操作や社会的な適応主義から自由なのだ。彼らは精神病院の患者、孤独に生きる者、社会不適応者、受刑者、あらゆる種類のアウトサイダーたちなのである。これらの人々は、沈黙と秘密そして孤独の中、独学で創造活動を行っている。いっさいの伝統に無知であることが、彼らをして創造性にあふれ、破壊的な作品制作を可能にしているのだ。ジャン・デュビュッフはアール・ブリュットという概念の提唱者であるのみならず、アール・ブリュット・コレクションの創始者でもある。

現在、収蔵作品は3万5千点におよび世界中から年間約4万5千人の観覧者が訪れている。

編集後記



昨夏の企画展「生きものバンザイ!」に出展いただいたあべ弘士さんが私たちにこんなメッセージをくれた。

「動物園の飼育係だったころ、自分たちはこの動物園で何を大事にし、何を考えるべきなのか、ということについて話していた。パンダやキリンのことを考えるのではなく、自分たちはこの北海道で生きているキタキツネとかのことをもっと考えていけないといけない。そもそもパンダたちはこの地にはいなかった。この地に元々から生きている動物たちのことを大事にして考えてあげないと。それが動物園で働く自分たちの仕事だ。」と。

当ミュージアムについても同じことが言えるだろう。自分たちが活動しているこの地域(足元)とのことを再度見つめ直し、誰からも愛されるミュージアムにしていくために何を大事に、何をしていくのか、改めて考えさせられた。

当ミュージアムでは、今年度、夏休みに「NO-MAの小さな夏祭り」として、1週間日替わりのワークショップを地元の小中学生を対象に開催した。アクセサリーづくり、スライム作り、影絵に絵画などのワークショップを開催し、のべ90名を超える子供たちが参加してくれた。冬には近江兄弟社小学校の親子プログラムとの連携で、「まちの木霊を探そう!」と題し、NO-MA周辺の町中をグループに分かれて、散策し、街の中にある「ちょっと気になる」看板や小屋や石ころなどを探して回った。そしてそれらをインスタントカメラに収め、オリジナルマップを作成し、白雲館(観光案内所)に展示した。

交流や連携という意味では、もっと色々な関わり方があるのかもしれない。今年度実施した事業をさらに深め、そして発展させながら、地域の文化施設として、地域の人たちが、気軽に立ち寄れる空間としてあり続けたいと考えている。

次回 展覧会予告 Coming soon

岩崎司展~大志と正義 そして、それゆえの苦悩~

6月13日(金) ▶ 8月10日(日)

10:00-17:00

大人300円 高大生250円

中学生以下無料

岩手県江刺市に生まれた岩崎司(1928年-2006年)は、10代から魚屋で働き、42歳に水産加工品仕入れ販売業の有限会社を設立。「世の中をよくしたい」と1967年(39歳)江刺市市議会議員に立候補し、初当選する。その後1979年(51歳)まで議員の役職を務める。岩手県議会議員になる志を抱くが、度重ねる借金や奇行などが発端となり、1983年(55歳)病院に入院となる。1991年(63歳)入院から8年後。ベットの上で絵を描き始める。独自の画風と若いころから好きだった短歌を組み合わせた作品を制作し、2006年(78歳)で他界するまで、その創作活動は続いた。今展では、現在、アウトサイダー・アートの作家として注目されている岩崎司の画業を紹介します。

緑為す大高原に佇まむ 燃ゆる想ひに誰か識るらん

光りあれ影はいろいろ見るがよし 人はそれぞれ影のみで識る

岩崎司作「警醒百五十詠」より



お知らせ

：現在開催の「アール・ブリュット/交差する魂」展終了後の5月12日(月)~6月12日(木)まで、次の展覧会の準備のため休館となります。ご了承下さい。